

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20720021
 研究課題名（和文）
 中世日本社会における宗教思想と技術—職能による世界観の構築—
 研究課題名（英文）
 Religious Ideology and Technical Skills in Medieval Japanese Society: The Construction of a Worldview through Skilled Workers
 研究代表者
 松本 郁代（MATSUMOTO IKUYO）
 横浜市立大学・国際総合科学部・准教授
 研究者番号：60449535

研究成果の概要（和文）：

本研究は、中世日本の宗教思想の実相をより社会・政治的な問題として捉えるために、従来の宗教思想研究が教義の宗派や教理に規制される点を批判的に継承し、中世の日本社会を基盤とする宗教思想とその担い手である職能民について論じた。

研究成果の概要（英文）：

This research addresses the religious ideology of medieval Japanese society as a political and social issue. In order to examine this theme, I question the conventional study of religion that focuses narrowly on sects and doctrines, and discuss religious ideology in the context of medieval Japanese society and the sector of skilled workers that supported its foundation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教思想史

キーワード：中世王権 職能民 宗教職能者 即位儀礼 仏教

1. 研究開始当初の背景

近年では物質文化に関わる研究手法として、欧米では Visual and Material Culture Studies（視覚文化・物質文化研究）が隆盛しており、その影響によって、あらゆる歴史的遺物が文明とは切り離せない文脈に置かれている。かかる手法は、宗教思想・文化を扱う上でも重要な視点であると考えられる。しかし、この手法は、現在のところ、遺物が

作られた技術的側面に意義の重きがおかれ、主に考古学や美術史の分野で用いられているため、何らかの世界観を造形したものであっても、その成立過程において影響したであろう政治的・思想的契機にあまり関心が払われていないのが現状である。従って、本研究では日本中世に構築された宗教的世界観を一つの思想的遺物として捉え、宗教（技術）者によって構築された「聖地」や、これらに

よって荘厳を必要とした「中世王権」の視点から切り込むことにより、新たな視座による思想的な発想を基盤とする視覚・物質文化研究の遂行を目指すものである。

一方、中世日本の宗教・思想的特色を象徴的に表す概念に「中世神話」「密教世界」「中世王権」などがある。これらのバックボーンには、いずれも中世の宗教世界を基盤とする知的ネットワークが介在し、さまざま事象と影響し合った結果、一つの宗教的世界観として当時の社会や国家に浸透していた点が指摘されている。これらの概念を使用した研究は、現在、史学や文学、宗教思想をはじめ様々な分野で行われ、今や中世日本の宗教文化・思想を論じる上で重要な概念として認識されている。しかし、これらの概念を主体とした研究は、資料の制限や方法論的規制によって、主に言説や観念的世界の中で解消されているのが現状であり、その研究史的位置づけは極めて曖昧なものとなっている。

これらを踏まえ、本研究では、観念的側面のみならず、これらによって創出された思想的な遺物を職能や職能者の技術と結びつけている点で、従来の研究を一步進めるものと考えられる。

2. 研究の目的

中世日本社会における宗教的世界観を、国家形成や王権に関わる政治的・支配的イデオロギーとしての側面のみならず、世界観を形象化した遺物（地図や建築、聖地など）を含む文化の総体的なものとして捉え、中世日本社会において構築された独自の宗教世界を多角的側面から浮き彫りにし、一つの歴史的な文脈のなかにこれらを位置づけることを目的とする。

中世の日本は、呪術的な宗教の力が政治的に利用され、それによって形成された大きな世界観が特権的に通用し、それが崩れた時代でもある。換言すれば、中世とは、かかる世界観の創出、形成、成熟、瓦解などのあらゆる宗教の形を体験した時代であるといえよう。申請者は本テーマに関する研究をいくつかまとめているが、本研究では、これらの画期となるプロセスを追いながら、中世日本が抱える宗教問題を、宗教的世界観の問題として捉え、新たな意義を見出したい。

そもそも、宗教を世界観の問題として捉えるその最大の理由は、中世において「世界観」といわれるものの大半は、宗教に備わる固有の不文律によってその土台が形成され、荘厳されている場合が多い。そのため、本研究では、宗教を特別なセクトに分けて解釈するのではなく、まず社会に構築された世界観を読み解く、あるいは見出すことから始めたい。

そして、社会に基盤をもつ宗教的世界観が生みだされた思想的・宗教的技術と、その遺

物などの創出やこれらの保持を実現させる技術を有した、中世日本社会における宗教（技術）者、職能者（職人）の技能活動を分析する。具体的には、次の三点を中心に追究することを目的とする。

(1) 中世における民間宗教者の動向

①権威創出の技術的過程、②権威を荘厳する知識の根拠と源泉

中世において存在根拠を権威的存在（天皇や貴種、大寺社）に所属・依拠した民間宗教者（伝統的工人・女性工人・宗教者・非農業民等）の集団や、生活・活動基盤の基本的性格を把握し、宗教者の技能（skill）によって創造された世界、特に、彼らが操作した王の権威を荘厳する知的装置の源泉を解明する。これに付随して、都市における社会的身分の問題（身分外身分とされ賤視された点）も合わせて考察する。

(2) 「聖地」の思想的地位

①「聖地」の特色、②「聖地」にこめられた思想

中世日本における宗教（技術）者との共通性に、人の生と死、聖と俗に関わる職能、呪術的な力を有していた点が挙げられている。このような性質の職能によって形成された「聖地」の中世的な特徴を、思想的・技術的に追究し、「聖地」（参詣や巡礼の場）と相対化させ、中世日本における宗教的特色を明確にする。

(3) 中世王権の文化史的位置と歴史的な文脈①思想的側面、②文化的側面

(1)(2)によって、従来、日本中世の王権の起源とされた宗教思想や、それに基づき創造された聖地の存在意義を、単なる観念的な産物としてではなく、実体的な遺物と思想とを融合させた上で、中世日本における王権の文化史的位置づけを行う。さらに、中世における王権の世界観を、一つの歴史的な文脈に位置づけることにより、中世社会における宗教的世界観の裾野を広げる。

3. 研究の方法

中世における宗教者の動向を中心に調査する。日本の宗教者については中世に成立した「職人歌合」に登場する職人（番匠・鍛冶・塗師・蒔絵師・巡礼・勸進聖・暮露・放下・持者・巫・獅子舞など）の他、声聞師・清目・河原者・散所法師・供御人・犬神人などの非人や芸能民を含めた宗教者の分析を行う。

研究方法として、文献資料だけではなく、実際に彼ら宗教（技能）者が創造した文化、携わった職能に関する資料、絵画に描かれた彼らの姿を収集し分析する。これにより、宗教者の技能を、思想のみならず技術的にも積極的に再評価する。

以上を踏まえ、本研究の核となる中世における宗教者（職人）、王権（帝権）、聖地の三

つのポイントを東アジア世界と比較し、これらの結節点を導く。

本研究は、本来は、普遍的指向性をもつ宗教思想を源にするものであるが、歴史の時間軸にあわせてこれらを捉えていくために、多くの専門的な研究を吸収する必要がある、学際的な研究手法・方法論的な発想を重視した研究を行う。

4. 研究成果

中世社会に登場した思想的な造形物がどのような職能や宗教に支えられて生成されたのかについて、いくつかの具体的な研究を通して考察した。本研究は、従来の宗教思想研究が教義の宗派や教理に規制される点を批判的に継承し、社会生活や政治から誕生する宗教的思想や造形（遺物）を捉えた。

初年度（1年目）は、中世日本社会における宗教的世界観の構築にかかわる、思想や技術の担い手、その伝授の方法について考察するとともに、かかる世界観の根源的存在とされた中世王権をめぐる思想的構造や中世に生成した世界観が次世代にどのように展開したか、考察を進めた。

宗教的世界観にもとづく思考規範は、仏教思想に基づく時空間が認識されることにより、社会的な定着を見せはじめた。その思考規範は、主に寺家内で行われた伝承方法の一つである灌頂儀礼が、仏教寺院を離れた場で、文化の伝承方法として成立し、それが、中世の文化形成に関わっていたことはつとに指摘されているが、必ずしも仏教から発展していない文化の発展に、仏教世界で用いられた伝授の形式が果たした役割に見出すことで、文化を形成した思考規範を方向付けたものに仏教の普遍性を認めることができる。また、江戸時代に作成された即位印明伝授に関わる文書の記述を分析することにより、中世で構築された仏教的世界観が、次第に普遍性を失い、逆に特定の家が宗教界を支配するための言説として利用し、結果的に特殊な世界を構築する言説として再編成された。

一方、仏教が技術的に果たした役割について、中宮御産を事例に考察し、生命の誕生に関連する一つの技術として、医学的技術とは別に、宗教的技術としての仏教の役割を捉えた。中宮を守護し安産祈願を目的とした点は従来の論と変わらないが、安産を祈る呪術的な信仰心が仏教規範に基づく思想と結びつくことで、技術的な宗教としての意義を獲得し、中世王権の源泉を担う宗教技術の一つとして展開する可能性を指摘した。

宗教的世界観に基づく思考規範は、中世社会における文化や技術の進展を形成するものであったが、本研究ではいくつかの事例の過程における宗教の役割を分析することにより、中世社会における宗教の意義とその展

開の一端を示した。

最終年度（2年目）は、宗教職能者の社会的立場づけと社会的位相、宗教思想が生み出す中世王権の実相、さらに、宗教職能者が持つ宗教技術としての呪術や加持祈祷の意味について考察した。

特に、宗教職能者が生み出す「聖」「俗」の区別は、聖地を創造するというより、日常のなかに聖俗という社会的秩序や区分を作り出すことが職能の前提にある。よって、職能による聖地化とはいわば修法の思想から生み出される世界観に基づく点を明らかにした。さらに、宗教を職能とする職能民の労働形態に定住と非定住がある。職能民が描かれた絵画資料「職人絵」には、定住職能民しか描かれなくなっている点から、彼らの職能を介した社会における「聖」と「俗」世界の境界線を読み取ることができる。また、職能的宗教者がおかれた社会的視線と、視線に基づく描き分けられ方について考察した。中世の宗教思想に教義的側面と実践的側面がある点は従来指摘されているが、これ以外に社会的に咀嚼され形成された新たな宗教思想の在り方も加える必要がある。

本研究では、宗教技能や技術を専門として生活を送った人々を宗教職能者と称すが、平安時代末期から南北朝時代にかけては権門寺院の僧も同様の活動を送っていた。それは、天皇の元に出入りしながら、新たな密教的な王権解釈を行う天皇護持僧などである。特に南北朝時代は天皇家の分立が政治のみならず宗教界をも巻き込んだが、問題点は二つの王権をどう職能化するかというものである。特に、平安時代以降に蓄積された三種神器に関する密教的解釈を推進したのが天台僧であったことから、彼らの王権構想について考察を試みた。中世における宗教職能者とは、宗教を専門とする職能を有しつつ、宗教の在り方を宗教の内側と外側から変容させる個性と呪力を有した者であったと考えられる。かかる職能による世界観とは、思想の中に構築されるのではなく、活動そのものによって構築されると結論付けることができる。

最後に、方法論について付言しておきたい。社会的・政治的背景から誕生する宗教思想や造形の在り方は、従来の仏教史や宗教学と異なると考えられる。その方法論は、これらが誕生した同時代的な資料を丹念に読み解くことによって導き出されるものであり、大きくは歴史学的方法論をとる。しかし、さらにそこから導き出される素材は、学際的な解釈学を必要とするものであり、一つの学問的枠組みに留まっては解決できない問題であると考えられる。学問の細分化や逆に概説化が問題視されているなか模索すべき新たな学問的方法とは、単に方法論を問うのみなら

ず、具体的な研究・分析を通して実証していくことが欠かせないと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

松本郁代「南北朝時代における即位灌頂と代始三壇法—台密の天皇護持とその思想的営為—」(『横浜市立大学論叢』61-3、横浜市立大学学術研究会、2010年3月、pp. 263-300) 査読有

松本郁代「中世仏教と秘儀伝授—灌頂と神話の文化的共有」(ジェームス・バスキンド編『日本の仏教学者：21世紀の仏教学にむけて』国際日本研究センター、2009年3月、pp. 179-194) 査読無

松本郁代「江戸中期における即位印明伝授と撰籙神話—九条家相伝の叙述をめぐって—」(『横浜市立大学論叢』60-3、横浜市立大学学術研究会、2009年3月、pp. 257-292) 査読有

松本郁代「中宮御産と密教—『宝秘記』尊星王法御修法をめぐって—」(『日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』名古屋大学GCOEプログラム、2009年2月、pp. 81-88) 査読無

[学会発表] (計5件)

松本郁代「「即位灌頂の時間と空間—神話と歴史の連続性と非連続性—」(アジアの王権儀礼と灌頂」研究会、2010年2月、金沢大学)

松本郁代「「加持・祈祷・呪／咒文」 ロンドン大学SOAS日本宗教センター：ワークショップ「Healing and Divination」(2009年9月4日、ロンドン大学、イギリス)

Ikuyo MATSUMOTO 'Amaterasu as Esoteric King: Understanding the Emperor's Original Ground' (12th EAJS International Conference Special Events in Medieval Japan、2008年9月20日、サレント大学、イタリア)

松本郁代「中宮御産と密教—『宝秘記』尊星王御修法をめぐって」(名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第4回国際研究集会「日本における宗教テキストの諸位相と統辞法」2008年7月19日、名古屋大学)

松本郁代「聖域と結界：神泉苑における請雨経法」(《Censure, Autocensure et Tabous》, QUATRIEME COLLOQUE D'ETUDES JAPONAISES DE L'UNIVERSITE DE STRASBOURG、2009年3月22日、ストラスブール大学、フランス)

[図書] (計1件)

松本郁代「中世における職人絵の表象—職能者をみる目線と社会—」(松本郁代・出光佐千子編『風俗絵画の文化学』思文閣出版、2009、pp. 199-121、全355pp)